

戦前中国の日本人学校出身中国人による同窓生ネットワーク構築に関する歴史社会学的研究

佐藤 量

本稿の目的は、戦前中国の日本人学校に通った中国人同窓生を対象に、ポストコロニアル時代における日中同窓生ネットワーク構築とその背景について考察することである。戦前中国には数多くの日本人学校があり、富裕層やエリート層の中国人が通っていた。しかし日本の敗戦と同時に、彼らの立場は大きく変化し対日協力者となる。対敵協力者の戦後処理問題は、戦後社会の再編において重要な問題であり、ポストコロニアルの文脈で解釈されるべきである。本稿では、中国人同窓生が戦後社会の再編のなかで、日本と中国の双方の国家とどのようにかかわっていったのか考察してゆく。

I章では、対日協力者を処分する問題が、日本人学校出身の中国人同窓生にどのような影響を及ぼしたのか検証する。

II章では、「グレーゾーン」に立つ中国人同窓生として、旅順工科大学の中国人同窓生に注目し、戦後中国社会とどのように向き合ってきたか検証する。

III章では、1980年代に中国人同窓生が同窓生ネットワークを形成した背景を検証する。

IV章では、日本人同窓生と中国人同窓生の交流について検証する。